

様式第4 [基本計画標準様式]

- ①基本計画の名称：高山市中心市街地活性化基本計画
- ②作成主体：岐阜県高山市
- ③計画期間：令和6年4月から令和11年3月（5年）

1. 中心市街地の活性化に関する基本的な方針

[1] 高山市の概況

(1) 位置

本市は、岐阜県の北部、飛騨地方の中央に位置し、周囲を飛騨市、下呂市、郡上市、大野郡白川村、長野県、富山県、福井県、石川県に囲まれている。

本庁所在地は、東経137度16分、北緯36度09分、海拔573mに位置している。



(2) 地勢

本市は、東西に約81km、南北に約55kmあり、面積は2,177.61 km²の日本一広い市である。面積の約92.1%は森林で占められ、山や川、溪谷、峠などで地理的に分断され、標高差も2,000mを超えるなど、地形的に大きな変化に富んでいる。

北東部には槍ヶ岳、乗鞍岳、穂高連峰などの飛騨山脈（北アルプス）を擁し、中央部には宮川が南から北へ流れ、南部には飛騨川が北から南へ流れ、南西部には庄川が南から北へ流れている。

標高の最高は奥穂高岳の3,190m、最低は上宝町吉野の436mである。

(3) 気候

本市の気候は、海拔高度の高い所が多いため、東北地方北部や北海道南部と似て夏は涼しく、冬は雪が多く厳しい寒さとなる。全体的には内陸気候であり、特に高山地域は盆地のため内陸性が顕著にあらわれる。飛騨山脈（北アルプス）をはじめ標高の高い山岳地域の気候は、山岳気候となる。

平年の年平均気温は11.4℃、8月の最高気温の平均は31.0℃、2月の最低気温の平均は-4.9℃である。過去の最高気温の極値は令和元年8月13日の37.7℃、同じく最低気温の極値は昭和14年2月11日の-25.5℃となっている。平年の観測日数は、最高気温25℃以上の夏日は110.5日、最低気温0℃未満の冬日は112.5日で、最高気温0℃未満の真冬日は7.7日に及ぶ。なお、最低気温25℃以上の日数は0.0日である。

風速は年平均1.7m/sで、一年を通じて風の弱い地域である。

降水量は年1,776.5mmと、飛騨地方の中では比較的少ないところとなっている。

平年の年最深積雪は55cmであるが、積雪の最深は128cm（昭和56年1月8日）である。

※上記のデータは、高山特別地域気象観測所（高山市桐生町）のもの。

※平年値は、1991年から2020年の統計によるもの。

※極値は、1899年5月からの統計によるもの。

(4) 高山市及び中心市街地の沿革（まちの成り立ち）

本市には、市内を流れる宮川や川上川などによって形成された沖積世の平地や、河岸段丘に面した山麓の緩斜面、扇状地などに、縄文・弥生・古墳の各時代の遺跡が多数存在する。それは古くから人々がこの地に住みつき、豊かな自然の恵みを受けつつ暮らしてきたあかしである。

飛騨地方が大和朝廷へ服属したのは諸説様々だが、5世紀以降のことと思われる。奈良時代の国府は高山盆地にあり、国分寺（総和町）と国分尼寺（辻ヶ森三社）が建てられた。天平勝宝元年（749）大野郡大領正七位下飛騨国造高市麻呂（ひだのこくぞうたけちまろ）が国分寺へ知識物を献じて外従五位下を賜ったとあり（続日本紀）、国分寺と大野郡の名が初見される。養老賦役令に「凡ソ斐陀国ハ調庸俱二免ゼヨ。里ゴトニ匠丁（木工）十人ヲ点ゼヨ。…」とあり、飛騨国は、匠丁を出すことによって庸調が免ぜられていた。それは「今昔物語集」での飛騨匠と絵師百済川成との腕比べの話や、「万葉集」に詠まれた「かにかくに物は思はじ飛騨人の打つ墨縄のただ一道に」のように、黙々と働く「ひだびと」の姿を通して今に伝えられている。

「高山」の地名は、永正年間（1504～21）に守護代多賀氏の一族高山外記が、現在の城山に城砦を築いた頃にさかのぼる。城内に近江の多賀天神を祀り、天神山・多賀山と称したことに由来するともいわれている。

後に京極氏の被官で、守護代多賀氏を祖とするとも伝える三木氏が益田郡に勢力を伸ばし、大永の頃（1521～28）大野郡にも進出し、多賀氏をしのいで実権を握った。三木自綱は斎藤道三の娘を迎え、信長美濃入国後は信長に近づき、天正7年（1579）松倉城を築城して本拠とし、天正10年（1582）江馬輝盛を破り、白川郷を除く飛騨を平定した

自綱は、秀吉に対抗した佐々成政と結んだが、天正13年（1585）秀吉の飛騨平定の命を受けた金森長近が越前大野城から兵を進め、自綱を滅ぼした。翌天正14年、飛騨に封ぜられた金森長近は鍋山城に入り、天正16年天神山に築城を開始、松倉・鍋山城下の商人を移し、白川郷の照蓮寺と和親の誓約を結び、城下に寺地を設け、城下町の形成に着手した。

城下町は武家屋敷、町人屋敷、寺院群に区分され、武家屋敷は城下江名子川左岸、南は大隆寺下まで、城下西麓から中橋までの宮川右岸、北麓空町一帯、江名子川北岸に及ぶあたりに配置されていた。三代重頼の弟重勝が分家して江名子川北岸に左京屋敷を建て、重頼は娘のために宮川左岸に向屋敷（今の高山陣屋）を建てると、そのあたりまで町家が広がった。

町人屋敷は、一番町・二番町・三番町が宮川右岸に南北に、それを東西に横切る形で安川町・肴町がそれぞれつくられ、南北方向に通りを発展させた町並であった。城下町によくみられる見通しがきかない道筋は、町の南部と北部に設けられた。

城の北方向には白川郷から照蓮寺13代明了を迎えて、照蓮寺を建てた。その周囲に寺内町が発達して照蓮寺がこれを管轄した。東山一帯には寺院が集められ、大雄寺・素玄寺・天照寺・宗猷寺といった金森氏にゆかりのある寺が建てられた。金森氏が出羽上ノ山に移封されるまでの金森6代107年間には、京文化および江戸文化を受け入れて、今日の高山の基盤が形成された。

幕府は元禄5年に飛騨を収公したあと、金森氏の向屋敷に代官所を設立し、関東郡代伊奈半十郎忠篤を初代の代官として兼任させ、徳川幕府直轄の天領として高山陣屋において代官・郡代が25代177年間にわたり治めた。

高山陣屋に代官が常時在勤するようになったのは、享保13年(1728)長谷川忠崇からのことであった。高山城は、加賀藩主前田綱紀の家臣永井織部に守らせていたが、元禄8年幕命により取り壊された。「飛騨の高山御城の御番つとめかねたよ加賀の衆が」といまも高山盆踊りの歌詞に残されている。この時代には江戸文化の影響を強く受けるとともに、その名を広く知られる高山祭が盛んとなり、屋台が造られ、市が行われるなど、社会的、文化的な基盤が確立された。



高山陣屋

人口は元禄8年(1695)1,259軒3,757人、延享元年(1744)1,513軒7,212人、天保13年(1842)1,671軒9,237人で、これは当時の岐阜町より人口が多く、有数の都市であった。

明治維新により東山道鎮撫使竹澤寛三郎が入国し、高山陣屋に天朝御用所の高札を建てた。慶応4年5月に飛騨県がおかれ、同年6月高山県となり、明治4年筑摩県に移管されるまでの3年6か月間、梅村速水、宮原積の二人の知事により治められた。

明治8年に高山一之町村・二之町村・三之町村が合併して高山町となり、また、大野郡片野村ほか22か村が合併して大名田町となった。翌明治9年に高山町は岐阜県の管下となり、明治22年に15,385人で新しい町制を実施し、大正9年の第1回国勢調査の人口は16,344人であった。その後大正15年に灘村を合併、昭和9年にはその後の高山および飛騨の発展に大きく寄与した高山本線が開通、昭和11年11月1日に大名田町を合併して市制を施行、「高山市」として発足した。昭和18年上枝村、昭和30年大八賀村を合併した。

平成17年2月1日には、丹生川村、清見村、荘川村、宮村、久々野町、朝日村、高根村、国府町、上宝村と合併し、日本一広大な面積を有する新しい高山市が誕生した。

現在、平成27年度からスタートした高山市第八次総合計画に基づき、「人・自然・文化がおりなす活力とやさしさのあるまち飛騨高山」を都市像に掲げ、多様なまちの魅力や財産を活かしあうことにより、新たな活力や元気が生まれるとともに、やさしさがあり、幸せが感じられるまちの実現を目指している。



(5) 高山市における中心市街地の歴史的・文化的役割

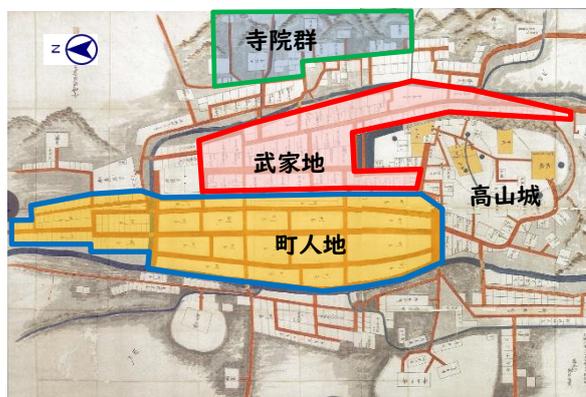
① 金森氏の飛騨入国と城下町の形成

越前大野城主であった金森長近は、天正13年（1585）に豊臣秀吉の命を受けて飛騨の三木氏を攻略し、飛騨を平定した。翌年8月7日、長近は飛騨国3万3千石の国主として入府している。入国した長近は、当初、^{うるしがいと}漆垣内町の鍋山城に城を構えたが、土地条件が整わず天神山古城（現在の城山地区）に高山城を築くことにした。

高山城の建築は天正16年（1588）から始め、慶長5年（1600）までの13年間で本丸、二之丸を完成させ、以後3年かけて三之丸が築かれている。そして、城と同時に城下町の工事も行なった。城を取り囲んで高台を武家屋敷、一段低いところを町人の町とし、この町人地の一部が現在の重要伝統的建造物群保存地区である。

城下町は、武家地、町人地、寺院群に区分される。

武家地は城郭下方の江名子川左岸に広がる^{そらまち}空町と呼ばれる高台一帯から江名子川北岸に及ぶあたりまで、東西約500m、南北約600mの範囲に配した。町人地はその高台の下である武家地の西側に配置され、城に近い方から一番町、二番町、三番町（後の一之町、二之町、三之町）が宮川右岸に南北方向に長くつくられた。それを東西に横切る安川通や肴横丁などがつくられ、^{はしご}梯子状の条筋で区画された町並みであった。寺院群は、武家地の東側に連なる山裾に配置された。これは、平湯街道が通るこの地域において防衛の要とするためであった。



江戸時代の高山城下町の配置

高山城下町の町人地は武家地の1.2倍と広く、全国の城下町の平均が武家地7割、町人地3割であることから考えても、町人地の広さに特色がある。商人の経済力を重視した金森長近の姿勢が現れている。また、越前大野や縁のある滋賀県矢島町などから商人を招き、城下町に集約される東西南北の街道も整備し、飛騨における政治、経済の中心としての機能を持たせて飛騨国の繁栄を図った。金森氏が出羽上ノ山に移封されるまでの6代107年は、京文化、後には江戸文化との交流が図られ、今日の高山の基礎がつけられた。

② 町並みの形成

町人地には敷地間口いっぱい町家が建てられ、街路の両側に建物が隙間なく建ち並ぶ濃密な町空間が形成されていった。近世を通じて町家の普請には厳しい建築規制が敷かれ、普請に際してはその種類、規模にかかわらず高山代官所の許可を必要とした。建物の外観に関しては、規制が明文化されていなかったものの、軒高を揃えることなど、町並みを意識した不文律が存在していた。現在の町並みの統一感は、この「町並」の語に象徴されるような不文律の存在によって形成され、保たれている。

江戸期から明治初期にかけては度重なる大火があり、それゆえ江戸中期以前に建てられた町家の遺構は一つも現存しない。現存する町家の多くは明治8年（1875）の大火以降に建築されたものであり、それ以前の町家の棟数はごく限られている。

明治期の高山の町家は、意匠的にも技術的にも江戸期の町家の延長上にあるものと考えられている。しかし、大正時代頃から交通網の発達などを背景に社会構造の変化が現れ、それに伴って町家の形式も変化していった。とりわけ昭和9年（1934）の高山本線開通により、鉄道駅が立地する宮川西部の開発が進み、その一方で川東の旧城下町は都市開発からとり残された。商業の中心も宮川西部の本町へと移動したため、旧城下町の店舗併用住宅だった町家は店じまいをするところが増え、かつて全面開放が可能な建具「シトミ」が入れられていた町家の正面に格子がはめられて、非開放の形式に移っていったと考えられている。

しかし他面において、都市開発から取り残された旧城下町の伝統的町家は保存状態がきわめて良好で、城下町時代以来の短冊形の地割が現在に至るまで継承されており、昭和54年（1979）、旧城下町の南半分の一部が三町伝統的建造物群保存地区に選定され、さらに平成16年（2004）年には、北半分の一部が下二之町大新町伝統的建造物群保存地区に選定されている。



三町伝統的建造物群保存地区（古い町並）

③ 旧城下町で営まれる人々の活動（二つの氏子領域と高山祭）

飛騨が幕府直轄地となると、武家地は陣屋とその周辺の地役人屋敷のみとなり、高山は町人中心の町となった。町人地の行政区画は、一之町、二之町、三之町を中心としてそれぞれ周辺の町場を含め、一之町村、二之町村、三之町村の三村にまとめられており、各村は更に細分化したいくつかの「町組」に分けられていた。町政においては、金森時代の町代が引き続き町年寄と名称を変えて各村を束ね、その下位の町組頭が各町組を統括した。

このように、高山の町政は一之町村、二之町村、三之町村の区画に従って運営されていたのだが、町人生活の実態は、これとは少し様相を異にしていた。安川通りを境に南が日枝神社の氏子領域、北が櫻山八幡宮の氏子領域であり、地域のコミュニティはむしろそのくくりでまとまっていた。日枝神社の氏子は春の高山祭である山王祭、櫻山八幡宮の氏子は秋の高山祭である八幡祭のそれぞれ主体である。この二つの領域は、お互いが対峙しつつ、それぞれに地縁的結合を育んできた。そして江戸時代山王祭や八幡祭の発展とともに、祭りと町組とが結びつき、やがて町組ごとに屋台を所有するようになって、「屋台組」と通称されるようになった。二つの地縁的結合が、互いに意識しあいながら幕領時代の高山の二つの核をなすとともに、屋台組がそれぞれのコミュニティを支えてきた。



八幡祭と山王祭の領域（金森時代）

昭和17年（1942）に、一之町、二之町、三之町は安川通りを境にそれぞれ「^{かみ}上～之町」、「^{しも}下～之町」というように分離され、ここにきて地縁的結合と行政区画とが一致することとなった。旧城下町は現在、安川通りを境として^{かみちやう}上町・^{しもちやう}下町と俗称されており、山王祭と八幡祭の競い合いを中心に、互いに意識し、そして高めあいながら文化的伝統を継承している。そして代々受け継がれた屋台を守り続ける屋台組は、日常生活の中での助け合いや共同作業、町並み保存活動など、祭りの枠を超えたコミュニティを今も保持し続けている。

[2]地域の現状に関する統計的なデータの把握・分析

(1) 人口動態

① 中心市街地の人口

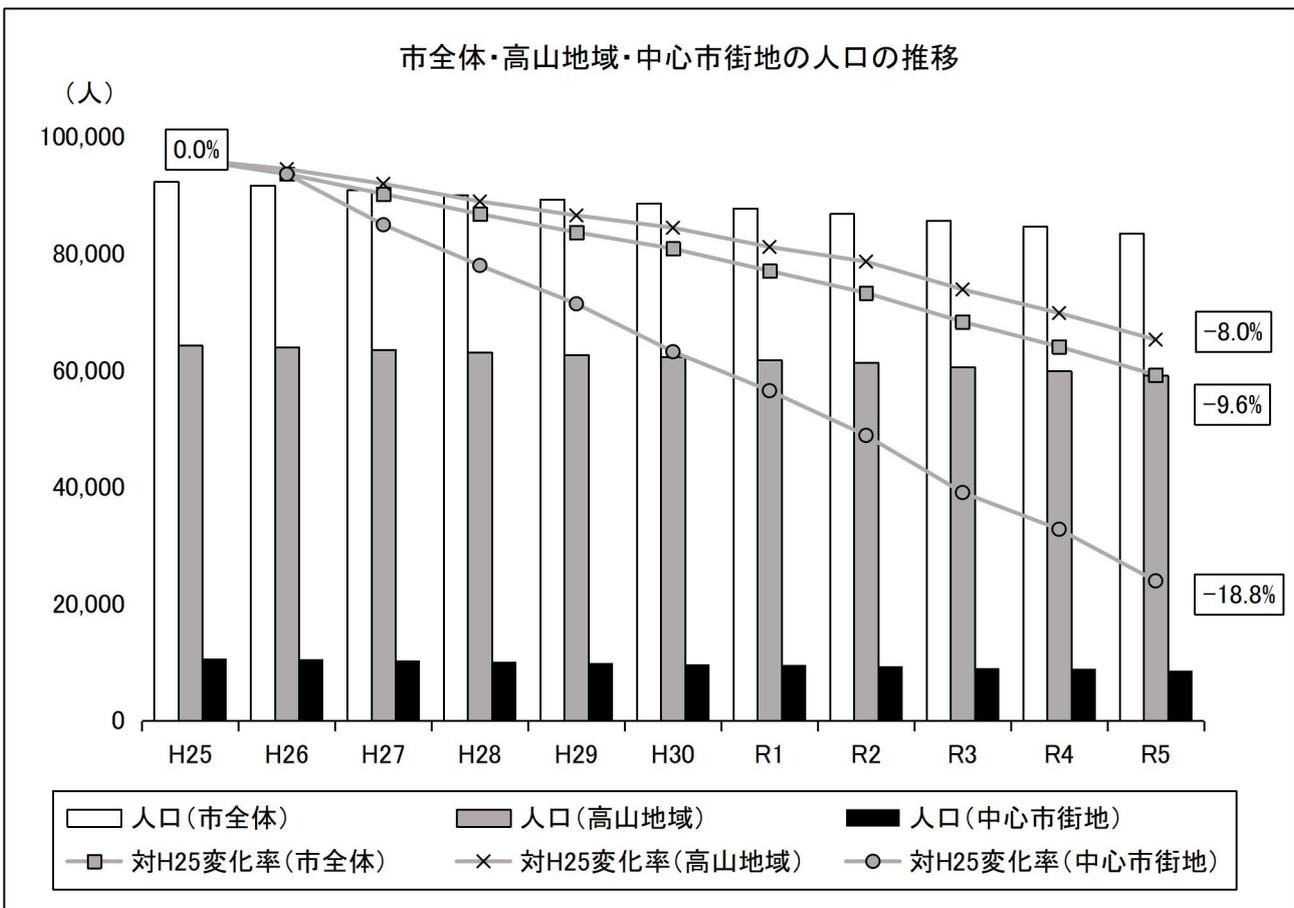
市全体の人口は平成25年から令和5年の10年の間に8,867人、9.6%減少し、高山地域(※)の人口は5,162人、8.0%減少、中心市街地の人口は1,999人、18.8%減少している。中心市街地の人口は、市全体や高山地域と比較しても減少率が高く、これは、少子高齢化の進行に加え、核家族化や生活様式の多様化に伴い郊外への転居が進んだことが主な原因であると考えられる。

※高山地域：平成17年市町村合併前の高山市のエリア

○人口

(単位：人)

	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5
市全体	92,328	91,729	90,904	90,077	89,328	88,655	87,740	86,838	85,649	84,626	83,461
高山地域	64,290	64,011	63,590	63,085	62,685	62,331	61,782	61,363	60,566	59,890	59,128
中心市街地	10,648	10,578	10,338	10,145	9,963	9,736	9,551	9,339	9,068	8,894	8,649



資料：高山市「住民基本台帳（各年10月1日現在）」

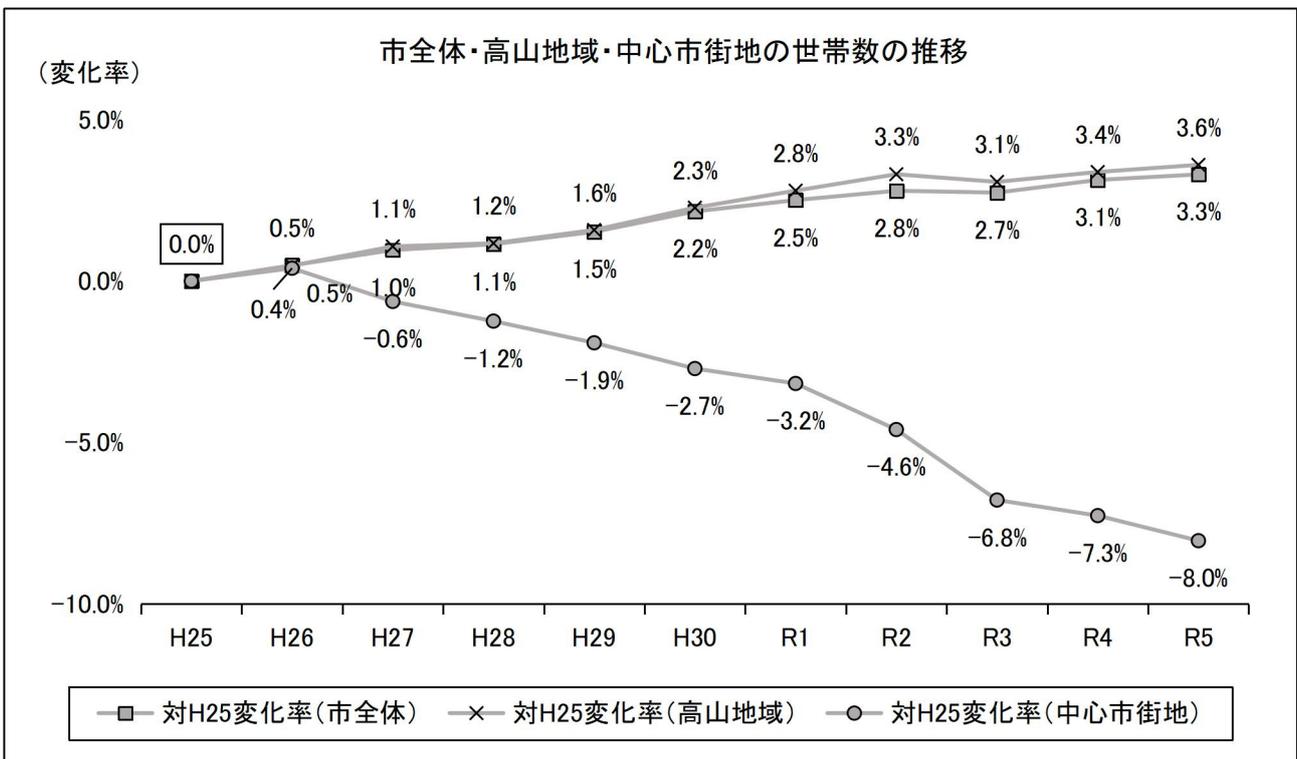
② 中心市街地の世帯数

市全体、高山地域では世帯数は増加しているが、中心市街地の世帯数は人口同様に減少傾向にある。中心市街地では、平成25年から令和5年の10年間に、世帯数が383世帯、8.0%減少している。

○世帯数

(単位:世帯)

	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5
市全体	34,913	35,084	35,249	35,312	35,446	35,666	35,789	35,890	35,870	36,007	36,067
高山地域	25,770	25,893	26,047	26,072	26,178	26,356	26,492	26,623	26,562	26,641	26,698
中心市街地	4,763	4,782	4,733	4,704	4,672	4,634	4,612	4,544	4,440	4,417	4,380



資料：高山市「住民基本台帳（各年10月1日現在）」

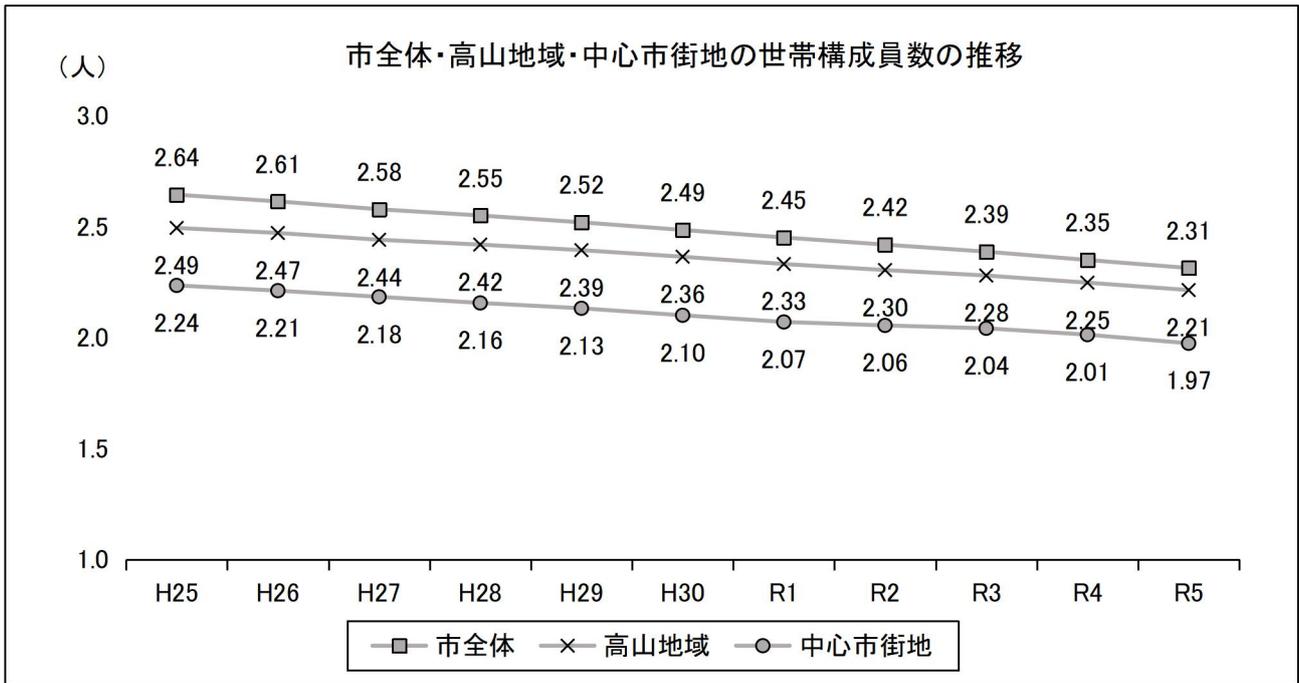
③ 中心市街地の世帯構成員数

世帯構成員数は、市全体、高山地域、中心市街地ともに減少傾向にあり、減少の進行速度に差は認められない（H25～R5間で、市全体では0.33人減少、高山地域では0.28人減少、中心市街地では0.27人減少）。ただし、市全体よりも中心市街地のほうが世帯構成員数は少なく、世帯が小型である。

○世帯構成員数

(単位:人)

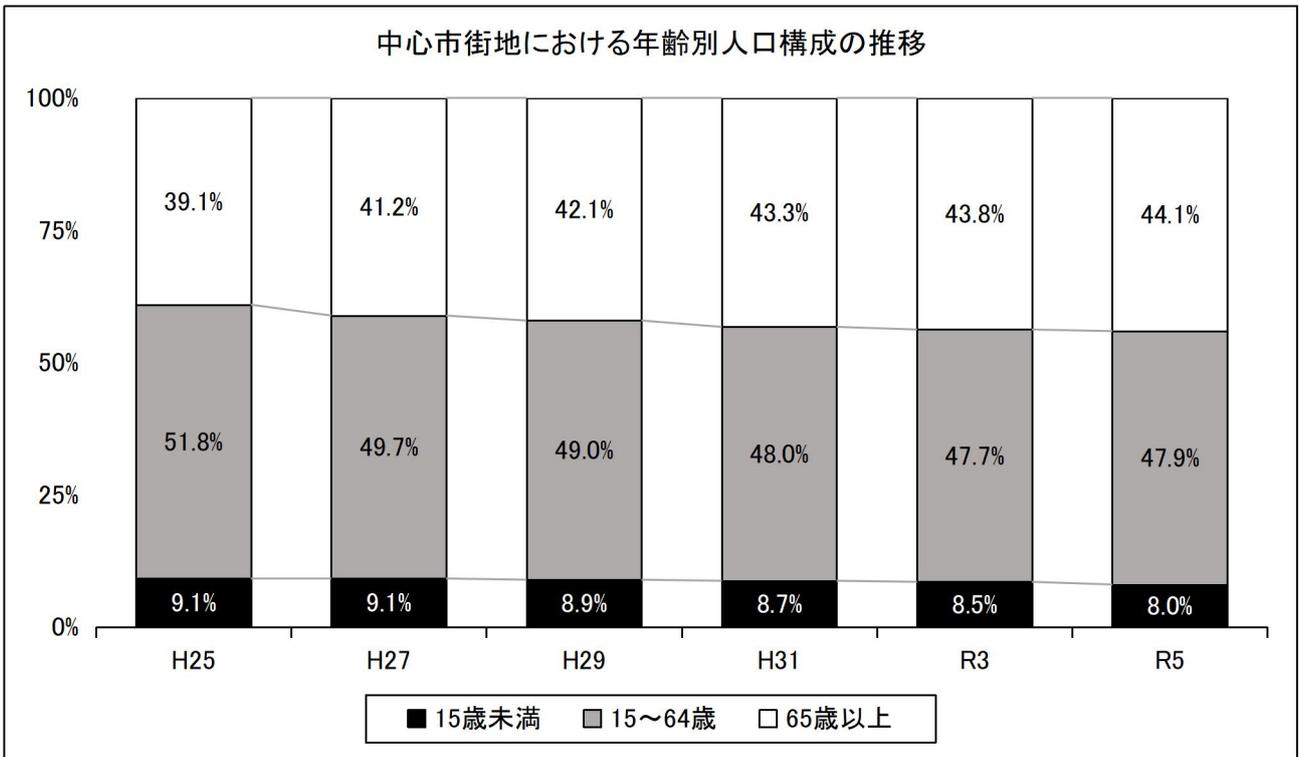
	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5
市全体	2.64	2.61	2.58	2.55	2.52	2.49	2.45	2.42	2.39	2.35	2.31
高山地域	2.49	2.47	2.44	2.42	2.39	2.36	2.33	2.30	2.28	2.25	2.21
中心市街地	2.24	2.21	2.18	2.16	2.13	2.10	2.07	2.06	2.04	2.01	1.97



資料：高山市「住民基本台帳（各年10月1日現在）」

④ 中心市街地における年齢別人口構成

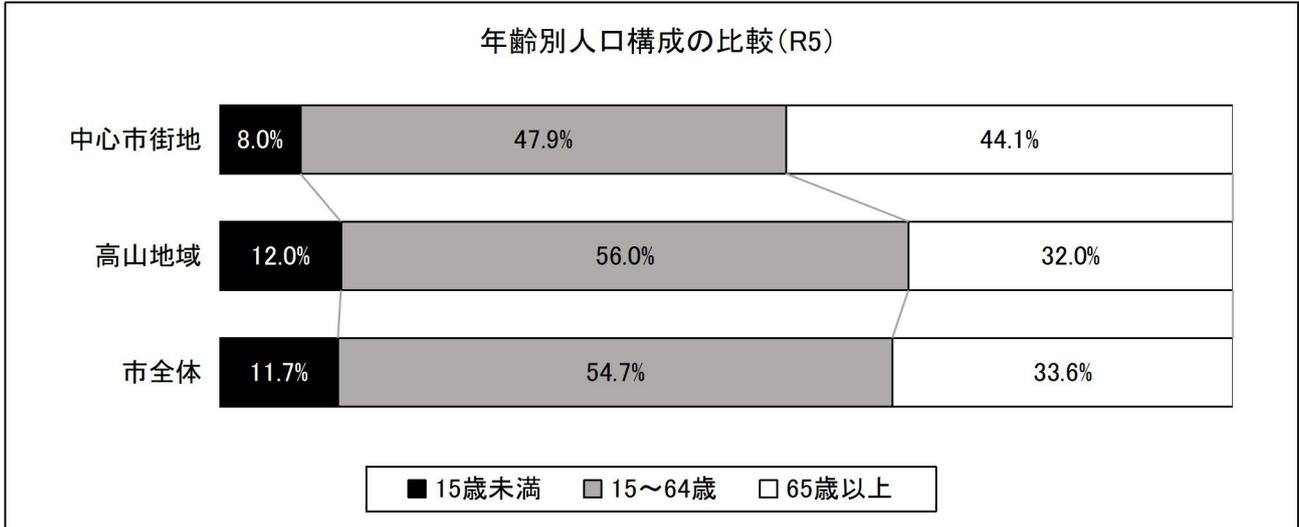
平成25年から令和5年の10年間で、中心市街地の人口全体に占める15歳未満の年少人口割合はほとんど変化していない一方で、15～64歳の生産年齢人口割合が減少し、その分65歳以上の老年人口割合は増加している状況にある。



資料：高山市「住民基本台帳（各年10月1日現在）」

⑤ 年齢別人口構成の比較

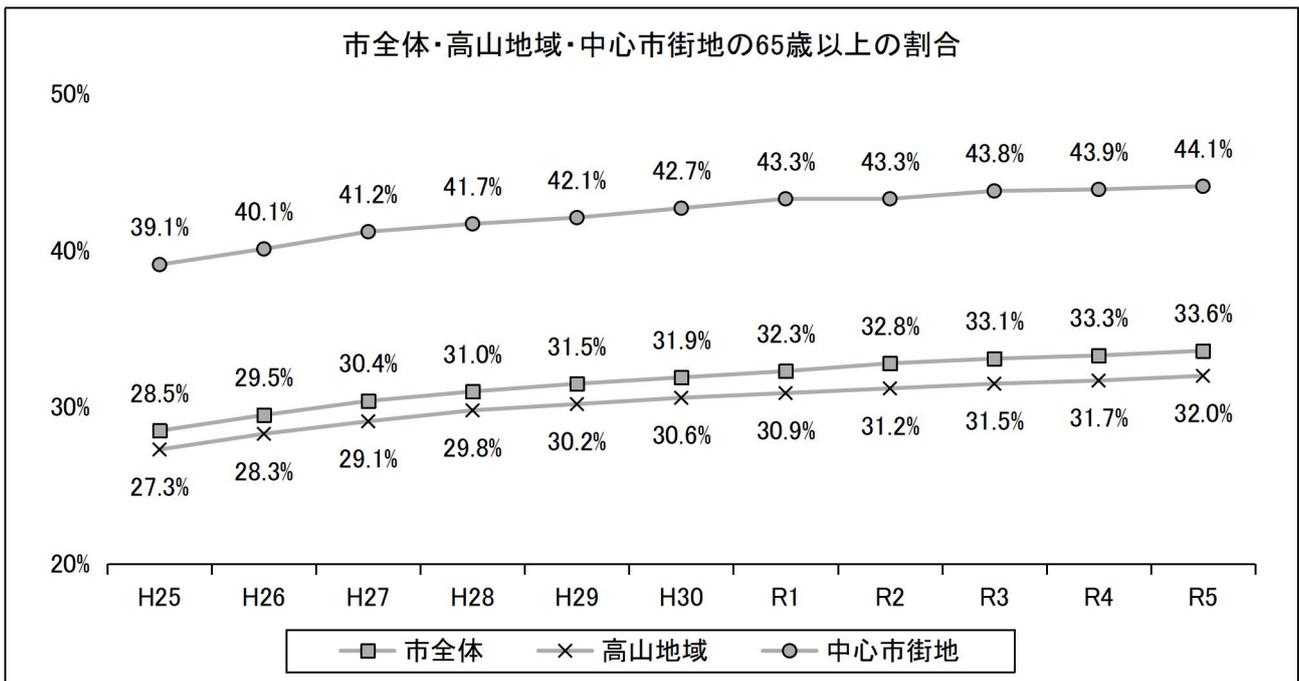
中心市街地の老年人口（65歳以上）は市全体、高山地域と比較すると割合が高いのに対し、年少人口（15歳未満）及び生産年齢人口（15～64歳）の割合は低い状況にある。



資料：高山市「住民基本台帳（令和5年10月1日現在）」

⑥ 中心市街地における高齢化率

市全体、高山地域、中心市街地いずれも高齢化率は年々上昇しているが、令和5年の中心市街地の高齢化率は44.1%となっており、市全体と比べて約10%、高山地域と比べて約12%も上回る数値となっていることから、より早く高齢化が進んでいる状況がうかがえる。



資料：高山市「住民基本台帳（各年10月1日現在）」